

### 3. 河岸の商港都市リスボン



コメルシオ広場を水上から見る。石造りの壁の白と屋根瓦の赤、そして紺碧の空のコントラストが素晴らしい。18世紀のリスボン大地震以降は、倒壊した王宮の跡地に出来た、この広場に海外からの産物が荷卸しされ取引されていたようだ。背景に緑のサン・ジョルジュ城が見えているが、この城はカエサルの時代にローマ人が造った要塞だった。その後、西ゴート族、イスラム教徒と城主が次々と変わっているが、その歴史がそのまま、ポルトガルの憂愁の源である。

ソドレー岸壁の船着き場から船に乗った。一旦、テージョ川をベレン地区の下流まで下り、そこからゆっくりと遡上して、ソドレーの船着き場を通り越して、レイロ・ド・パッソまでの船遊びである。ただし、船に乗ったのは暑い盛りの日差しを避けることだけが目的ではない。アルメイダとザビエルが旅立ちの時に目にし、二度と再び戻ってくるものなかつた景色を見たかった。それともうひとつ、日本を出発して3年もの歳月をかけてこの地にたどりついた天正遣欧使節の少年達が、ヨーロッパの大都会の街並みを初めて見た時の感動を共有したかったのだ。

水上から眺めるリスボンは素晴らしかった。何処までも澄み切ったターコイズ・ブルーの空に、白壁と朱色の屋根が映えている。テージョ川はスペイン中部に源を発しているタホ川の河口である。テージョもタホも語源は同じで、ポルトガル語とスペイン語の発音が違うだけの同じ川である。

この時代、どんなに大きな外航船でも木造である。海水につかったままでは、牡蠣やフジツボが付着して船足を重くしてしまう。さらに怖いのは船の躯体そのものである木材に忍び込んで、ぼろぼろにしてしまうフナクイムシである。船喰い虫というすごい名前がついているが実は二枚貝の仲間でミミズのようなグロテスクな形態をしている。名前の通り、よく見ると退化した二枚の貝殻をもっている。

これら天敵達から木造船を守る最も効果的な方法は、船を真水に浮かべる事である。そのためにこの時代の天然の良港とは、大河の河口から少し遡った淡水域で、しかも大船を浮かべることのできる水深を得られる場所という事になる。確かにポルトガルの代表的な商港であるリスボンもポルトもこの条件を満たしている。

川とは思えないほどの川幅があるが、リスボンの下流はさらに広がって海につながり水平線にかすむほどである。リスボン港を離れば、そのまま大海原に身をさらすようなもので、それゆえになおのことこの岸壁を離れて遙か東洋を目指した、1541年のまさに自分の35回目の誕生日のフランシスコ・ザビエルと、それに遅れる事7年目の1548年、23歳で喜望峰を回って東洋を目指したアルメイダの胸の内を思わざるを得ない。

さらには、あの河口の水平線を越えてやって来た天正の4人の少年達が、ベレンの塔を初めて目にし、壮大な白大理石のジェロニモス修道院を見た時の高揚感を共有した。ただ言えるのは、ザビエルは布教という、4人の少年達は主人の使者という使命感を持って、この水に浮かんでいたのだけど、ひとりアルメイダは何かの使命感を抱いていたとは思えない。むしろ、やけを起こしていたかも知れないし、何かの理由で生地を捨てたくなっただけかも知れない。決して意気揚々とニュー・フロンティアに向かおうというのではなかったことだけは確かだろう。彼がどんな思いで二度と見る事のない生地に別れを告げたのか、彼がわたしに語ってくれる何かを聞き逃すまいと、わたしはリスボン港の岸壁を見つめながら心の耳を澄ませていた。



この時は引き潮だったため、水上に浮かぶ貴婦人とはならなかったけど、この16世紀のポルトガル建築を代表する世界遺産の美しさは紺碧の空をバックに、増々磨きがかかっている。水面に一番近い最下層に開いている窓からは、砲口がのぞいて、そのことが、この美しい貴婦人の本当の役割を物語っている。ただ、この城塞が造られた16世紀以降、ここが戦場になったことはないらしい。



白い大理石のまるで人肌のような、やさしい輝きは、見るものの心を和ませしてくれる。それはベレンの塔のすぐ背後にある、ジェロニモス修道院も同じだが、これらの膨大な白大理石を見るだけでも、当時のポルトガルの富裕さを感じさせる。

しかしながら、この時期がポルトガルの絶頂期で、やがて隣国からの圧迫を受けながら、衰退の道を進むことになる。

水上から見たベレンの塔は実に美しい。塔という呼び名がついているが1520年に幸運王マヌエル1世が建立した要塞である。リスボン港を守るために、実は対岸にも大砲を

のぞかせた要塞があったという。ちょうどテージョ川の門衛として機能していたのだろうが、右岸のベレンの塔だけが有名になった。それもそのはずで、とにかく要塞だ大砲だという無粋な単語が似つかわしくないほど美しい。司馬遼太郎は「テージョ川の貴婦人」と呼んでいる。岸側の塔から、2階建ての砲台を兼ねたテラスが水上にのびて、その部分が水面に映っている。確かにまるで貴婦人が長いベールを引いているように見える。

塔の中央にはリスボンに出入りするキリスト教徒の交易船を守護してくれる聖母マリアの像が刻まれているが、この塔が築かれたマヌエル1世の時代は、この王が「幸運王」と呼ばれているように、ポルトガルの絶頂期でもあった。この時代の華麗・壮麗な建築様式はマヌエル様式と呼ばれているが、この幸運王マヌエル1世の好みであると同時に、絶頂期のポルトガルの経済力の象徴である。

しかし、忘れてはならないのはユダヤ人への強制改宗と改宗しなかったユダヤ人の国外追放も、この王の命令で断行されたことであり、そのことがいずれアルメイダの憂鬱となっていることである。